

## 使徒教父における幸いの宣言

著者	原口 尚彰
雑誌名	東北学院大学キリスト教文化研究所紀要
号	25
ページ	33-47
発行年	2007-06-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00024333/">http://id.nii.ac.jp/1204/00024333/</a>

# 使徒教父における幸いの宣言

原 口 尚 彰

## 1. 問題の所在

幸いの宣言は旧約聖書の知恵文学に由来する文学形式である(詩 1: 1-2; 2: 12; 32: 1-2; 33: 12; 34: 9; 40: 5; 41: 2; 65: 5; 84: 5-6; 94: 12; 106: 3; 119: 1-2; 127: 5; 128: 1-2; 137: 8-9; 144: 15; 146: 5; 箴 3: 13; 8: 32-34; 16: 20; 20: 7; 28: 14; ヨブ 5: 17; コヘ 10: 17)<sup>1</sup>。この文学形式は徳を持つ人物を賞賛する機能を持つ。文体に関して言えば, אֲשֶׁר (幸い) という言葉が文頭に置かれ, その後に幸いとされる理由や幸いとされる状態の描写が続いている。

ヘブライ語 אֲשֶׁר は七十人訳において通例, μακάριος と訳されている<sup>2</sup>。古典ギリシア語において μακάριος/μάκαρ は, δαίμων や εὐδαίμων と共に幸いを表す形容詞である。なかでも, μακάριος ὅς (または δαίμων ὅς) という文学形式は主として詩文に使われ, 非常に高揚した調子の讃辞となっている(ホメロス『デーメーテル讃歌』480-483; 『オデュッセイア』24.192; ピンダロス『オリンピア頌歌』7.11; エウリピデス『アルケースティス』915)<sup>3</sup>。この幸いの宣言の文学形式は苦しみや労苦や死を超越した神々の形容に用いられた(ホメロス『イリ

1 DCH 1.437-438; H. Cazelles, "אֲשֶׁר," *ThWAT* 1.481-485; F. Hauck/G. Bertram, "μακάριος κτλ.," *ThWNT* 4.365-373; W. Janzen, "Asrê in the Old Testament," *HTR* 58 (1965) 215-22; W. Käser, "Beobachtungen zum alttestamentlichen Makarismus," *ZAW* 82 (1970) 225-250.

2 G. Bertram, "μακάριος κτλ.," *ThWNT* 4.367-369.

3 H.D. Betz, *Essays on the Sermon on the Mount* (Philadelphia: Fortress, 1985) 30-33; idem., *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995) 93-97.

アス』1.339;『オデュッセイア』5.7;ヘシオドス『労働と日々』136;ピンダロス『オリンピア頌歌』1.52 他)<sup>4</sup>。次に、幸いの宣言は卓越した業績を挙げた人間に適用された(ホメロス『イリアス』3.192; 11.68; 24.377;『オデュッセイア』5.7;ヘシオドス『神統記』954-955;ピンダロス『ピトニア頌歌』5.59; 5.11; プラトン『法律』2.660e)<sup>5</sup>。

旧約聖書の影響の下に、初期ユダヤ教文書や(エチ・エノ 58: 2; 81: 4; 82: 4; スラ・エノ 42: 6-14; 52: 1-15; モーセ昇 10: 8; トビ 13: 15-16; シラ 14: 1-2, 20; 25: 8; 48: 11; Ps. Sol. 6: 1; 10: 1; 17: 44; 18: 6), 新約聖書に(マタ 5: 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11; 11: 6; 13: 16; 16: 17; 24: 46; ルカ 1: 45; 6: 20, 21, 22; 7: 23; 10: 23; 11: 27, 28; 12: 37, 38; 14: 14, 15; 23: 29; ヨハ 13: 17; 20: 29; 使 20: 35; ロマ 4: 7, 8; 14: 22; I コリ 7: 40; ヤコ 1: 12, 25; I ペト 3: 14; 4: 14; 黙 1: 3; 14: 13; 16: 15; 19: 9; 20: 6; 22: 7, 14) この文学形式が頻繁に使用されている。

幸いの宣言という文学形式は、使徒教父文書にも広範に使用されている(ディダケー1: 5; バルナバ 10.10; 11.8; I クレ 35.1; 44.5; 47.1; 48.4; 50.5, 6; 56.6; II クレ 16.4; 19.3; イグ・フィラ 10.2; ポリュ・フィラ 2.3; 3.2; 9.1; 11.3; 12.1; ヘルマス「幻」1.1.2; 2.2.7; 「戒め」8.1.9; 「喩え」2.10; 5.3.9; 6.1.1; 9.29.3; 9.30.3)。特に、クレメンスの第一の手紙やヘルマスの牧者はこの文学形式を頻繁に用いている (I クレ 35.1; 40.4; 43.1; 44.5; 47.1; 48.4; 50.5, 6; 56.6; ヘルマス「幻」1.1.2; 2.2.7; 「戒め」8.9; 「喩え」2.10; 5.3.9; 6.1.1; 9.24.2; 9.29.3; 9.30.3)。研究者たちの関心はこれまで専ら、旧約聖書中の幸いの宣言<sup>6</sup>、

4 F. Hauck, "μακάριος κτλ.," *ThWNT* 4.365-367; *PGL*, 821.

5 F. Hauck, "μακάριος κτλ.," *ThWNT* 4.365-367.

6 E. Puech, "4Q525 et les péripécopes des Béatitudes en Ben Sira et Matthieu," *RB* 98 (1991) 80-106; G.J. Brooke, "The Wisdom of Matthew's Beatitudes (4QBeat and Mt.5: 3-12)," *Scripture Bulletin* 19 (1989) 35-41; J.A. Fitzmyer, "A Palesitnian Jewish Collection of Beatitudes," *idem.*, *The Dead Sea Scrolls and Christian Origins* (Grand Rapids: Eerdmans, 1992) 111-118; J.H. Charlesworth, "The Qumran Beatitudes (4Q525) and the New Testament (Mt 5: 3-11, Lk 6:

または、新約聖書中の幸いの宣言の分析に向けられて来た<sup>7</sup>。しかし、使徒教父中の幸いの宣言についての本格的な研究はなされていない。本研究は使徒教父文書における幸いの宣言の文学的・神学的特色を検証することを通して、研究史上の欠落を補うことを目指している。

## 2. 個々の幸いの宣言の分析

### 2.1 ディダケーとバルナバの手紙における幸いの宣言

ディダケー1-6章は、「命の道」と「死の道」という人生における二つの対照的な生活態度を読者に提示している(1:1)。読者は命に到るために、勿論、前者の道を選び、後者の道を避けることが期待されている(1.2-4.14)。

ディダケー1.2は、キリスト者の行動原理として神の愛と(申6:5)隣人愛(レビ19:8)という二重の愛の戒めを引き、否定表現の黄金律を付け加えている(トビ4:15; アリステアス15.5; バビロニア・タルムード「シャバート」31a)<sup>8</sup>。読者は愛の戒めを实践するよう勧められる(ディダケー1.3a)。ディダケー1.3bは、*εὐλογεῖτε τοὺς καταρωμένους ὑμῶν καὶ προσεύχεσθε ὑπὲρ τῶν ἐχθρῶν ὑμῶν, νηστεύετε δὲ ὑπὲρ τῶν διωκόντων ὑμᾶς* (あなたを呪う者たちを

20-26).” *RHPR* 80 (2000) 13-35; H.J. Fabry, “Die Seligpreisungen in der Bibel und in Qumran,” in *The Wisdom Texts from Qumran and the Development of Sapiential Thought* (eds. C. Hempel/A. Large/H. Lichtenberger; Leuven: University Press, 2002) 189-200; 原口尚彰「4Q185/4Q525における幸いの宣言」『教会と神学』第42号(2006年)41-68頁。

7 J. Dupont, *Les Béatitudes* (3 vols; Paris: Gabalda, 1958-73); H. Frankmölle, “Die Makarismen,” *BZ* 15 (1971) 54-55; S. Schulz, *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich: Theologischer Verlag, 1972) 76-84; R. Guelich, “The Matthean Beatitudes: ‘Entrance Requirements’ or Eschatological Blessings?,” *JBL* 95 (1976) 415-434; G. Strecker, *Die Bergpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984) 28-49; I. Broer, *Die Seligpreisungen der Bergpredigt* (Königstein/Bonn: Hanstein, 1986); M. Sato, *Q und Prophetie* (WUNT 2/29; Tübingen: Mohr, 1988) 247-254; J. Kloppenborg, *The Formation of Q* (Philadelphia: Fortress, 1988) 172-173; U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus (Mt 1-7)* (2. Aufl.; Neukirchen-Vluyn; Neukirchener Verlag, 2002) 267-294.

8 マタ7:12とルカ6:3では黄金律を肯定的表現で引用している。

祝福し、あなたの敵のために祈り、あなたを迫害する者たちのために断食をしなさい) となっている。最初の部分は *εὐλογεῖτε τοὺς καταρωμένους ὑμῖν* (あなたを呪う者たちを祝福し) は、ルカ 6: 28 *εὐλογεῖτε τοὺς καταρωμένους ὑμᾶς* (あなたを呪っている者たちを祝福し) と一致している(ロマ 12: 14)<sup>9</sup>。しかし、第二、第三の部分は *καὶ προσεύχεσθε ὑπὲρ τῶν ἐχθρῶν ὑμῶν καὶ νηστεύετε δὲ ὑπὲρ τῶν διωκόντων ὑμᾶς* (あなたの敵のために祈り、あなたを迫害する者たちのために断食をしなさい) となっており、マタ 5: 44c: *ἀγαπᾶτε τοὺς ἐχθροὺς ὑμῶν καὶ προσεύχεσθε ὑπὲρ τῶν διωκόντων ὑμᾶς* (あなたの敵を愛し、あなたを迫害する者たちのために祈りなさい) に平行している<sup>10</sup>。但し、ディダケー版本文は、「敵」や「断食しなさい」という言葉が付け加えられ、マタイ版本文よりも長くなっている<sup>11</sup>。

ディダケー1.3b-2.1 は、二つの道の教えの中に後から挿入された付加であると考えられる(1.3a; 2.2-4.14)<sup>12</sup>。挿入部分には共観福音書に影響がはっきりと認められる。ディダケー1.4 は、*ἐάν τις σοι δῶ ῥάπισμα εἰς τὴν δεξιὰν σιαγόνα, στρέφον αὐτῷ καὶ τὴν ἄλλην καὶ ἔση τέλειος* (もし、誰かがあなたの右の頬を打ったら、もう一つの側も差し出しなさい。そうすれば、あなたは完全になるであろう。) となっている。この語録の最初の部分は、マタ 5: 39 に一致している(ディダケー-6.2; マタ 5: 39-42, 48; ルカ 6: 29)<sup>13</sup>。さらに、ディダケー1.5c

9 C.M. Tuckett, "Synoptic Tradition in the Didache," *The Didache in Modern Research* (ed. J.A. Draper; Leiden, 1996) 114.

10 H. Köster, *Synoptische Überlieferung bei den apostolischen Vätern* (Berlin: Akademie, 1957) 117, 121; Massaux, 3.149-182; W.-D. Köhler, *Die Rezeption des Matthäusevangeliums in der Zeit von Irenäus* (WUNT 2.24; Tübingen: Mohr, 1987) 43-47; K. Niederwimmer, *The Didache: A Commentary* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1998) 68; Tuckett, 116.

11 J.S. Kloppenborg, "The Use of Synoptics or Q in Did.1: 3b-2: 1," in *Matthew and Didache* (ed. H. van de Sandt; Assen: Royal Van Gorcum; Minneapolis: Fortress, 2005) 117-121.

12 Köster, 217-218; Köhler, 22-23; Kloppenborg, 113; Niederwimmer, 68; C. Tuckett, 110-111; C. Jefford, *The Sayings of Jesus in the Teaching of the Twelve Apostles* (Leiden: Brill, 1989) 38-39.

13 Köster, 226-230; Jefford, 42.

は、*μακάριος ὁ διδούς κατὰ τὴν ἐντολὴν ἀθῶος γάρ ἐστιν, οὐαὶ τῷ λαμβάνοντι* (幸いである、戒めに従って与える者は。彼は罪から免れるからである。災いである、受ける者は。) となっている。この幸いの宣言には、*γάρ* に導かれる *ἀθῶος γάρ ἐστιν* (彼は罪から免れるからである。) という文節が続き、幸いの宣言の根拠付けを与えている (I クレ 39.4; 44.5; 56.6; II クレ 16.4 を参照)。この幸いの宣言は、施しをする者を幸いとする一方で、施しを受ける者に災いを宣言している。ディダケーの著者は恐らく初期の教会に流布していた主の言葉伝承を引用していると思われる (使 20: 35; I コリ 2.1; ヘルマス「戒め」2.4-6)<sup>14</sup>。

バルナバの手紙は幸いの宣言の定型を2度用いている。バルナバ 10.10 は詩 1: 1 を引用して、*μακάριος ἀνὴρ, ὃς οὐκ ἐπορεύθη ἐν βουλῇ ἀσεβῶν* (幸いである、不敬虔な者たちの集いに赴かなかった者は。) と述べる (詩 1: 1)。この幸いの宣言には倫理的勧めの調子が強い<sup>15</sup>。文体的には、他の七十人訳中の幸いの宣言と同様に三人称で書かれている。他方、バルナバはよりキリスト教化が進んだ、*μακάριοι, οἱ ἐπὶ τὸν σταυρὸν ἐλπίσαντες κατέβησαν εἰς τὸ ὕδωρ, ὅτι τὸν μὲν μισθὸν λέγει ἐν καιρῷ αὐτοῦ τότε, φησὶν, ἀποδώσω* (「幸いである、十字架に希望を置きつつ水の中に入る者たちは」、「その時、私は報いるであろう」と彼は言う。) のような幸いの宣言も引用している (バルナバ 11.8b)。文体の点からすると、この幸いの宣言は三人称複数形で書かれている (マタ 5: 3-10 を参照)。幸いであるとする理由を与える副詞節は、*ὅτι* によって導入されている (バルナバ 11.8b; ヘルマス「幻」3.8.4; マタ 5: 3, 5, 6, 7, 8, 9; ルカ 6: 20, 21)。この幸いの宣言は、キリストの十字架を信じて洗礼を受ける者に幸いを約束している。この語録は恐らく初期の教会の口頭伝承を引用しているのものであると思われるが、他の初期キリスト教文献には平行例がない。

14 Jefford, 49-51.

15 Ibid, 222-225.

## 2.2 クレメンスの第一、第二の手紙とイグナティオス書簡における幸いの宣言

クレメンスの第一の手紙の著者は、幸いの宣言を用いるにあたり、様々な文体を自由に用いている。Iクレ 35.1'では、信徒に付与される神の恵みの賜物、つまり、永遠の命、義における輝き、大胆な真実、確信を持った信仰、聖なる自己抑制が、「幸いであり、素晴らしい」とされる。この幸いの宣言は、三人称複数形で書かれている。他方、Iクレ 50.5における幸いの宣言は、一人称複数形で書かれている：*μακάριοι ἐσμεν, ἀγαπητοί, εἰ τὰ προστάγμα τοῦ θεοῦ ἐποιοῦμεν ἐν ὁμονοίᾳ ἀγάπης, εἰς τὸ ἀφεθῆναι ἡμῖν δι' ἀγάπης τὰς ἁμαρτίας*（幸いである、私たちは、愛する者たちよ。私たちの罪が愛を通して赦されるように、愛の一致のうちに神の戒めを実行するのならば）。しかし、この最後の部分（私たちの罪が愛を通して赦されるように）には、解釈上の問題がある。一体誰の愛を通して私たちの罪は赦されるのであろうか？ それは、私たちに対する神の愛を通してであらうか、それとも、私たち自身の愛を通してであらうか？ パウロであれば、私たちの罪は神の愛によって赦されると言うであらう（ロマ 5: 5, 6-11; 8: 31-39）。しかし、ここでクレメンスが念頭に置いているのはむしろ人間の愛のように思われる。この幸いの宣言の前半部では、*ἐν ὁμονοίᾳ ἀγάπης*（愛の一致のうちに）という表現があり人間の愛を指している。同様に *δι' ἀγάπης*（愛を通して）という表現は、「私たちの愛を通して」ということを含意している。

それに続く節において（Iクレ 50.6）、クレメンスは詩 32: 1-2 に出て来る有名な幸いの宣言を引用して、*μακάριοι, ὧν ἀφέθησαν αἱ ἀνομίαι καὶ ὧν ἐπεκαλύφθησαν αἱ ἁμαρτίαι μακάριος ἀνὴρ οὐδ' οὐ μὴ λογίσσεται κύριος ἁμαρτίαν οὐδέ ἐστιν ἐν τῷ στόματι αὐτοῦ δόλος*（幸いである、その科が赦され、その罪が覆われた者たちは。幸いである、その罪を主が勘定に入れず、その口には悪意がない者は）<sup>16</sup>。この文節は、*γέγραπται γάρ*（というのは、次のように書かれ

ているからである) という旧約引用の定型によって導入されている。この二重の幸いの宣言は、前半が三人称複数形、後半が三人称単数形で書かれている。幸いの宣言の本文は七十人訳聖書から採られている。詩 32: 1-2 は、ロマ 4: 7-8 でも引用され、律法の業ではなく信仰によって義とされることの根拠とされている(ロマ 4: 6 を参照)。この箇所はパウロ書簡において形容詞 *μακάριος* が出て来る数少ない例の一つである(ロマ 4: 7-8; 14: 22; I コリ 7: 40)。パウロは名詞 *μακαρισμός* も使用し、神学的幸福論を展開している(ロマ 4: 6, 9; ガラ 4: 15)。パウロの理解によれば、詩 32: 1-2 の発言は、信仰によって義とされた者にも妥当する。従って、この宣言は旧約時代の人々のみならず、パウロと同時代のキリスト教徒にも当てはめることが出来る。同様に、クレメンスは詩 32: 1-2 を同時代の信徒に対して直接に適用している(I クレ 50.7)<sup>17</sup>。クレメンスの聖書解釈法は、パウロのそれに類似しており、旧約箇所をキリスト教徒が幸いであることを証明する根拠として引用している。ロマ 4: 7-8 と I クレ 50.6 の間に存在する相違は、クレメンスがパウロのように信仰義認の教理に関心を持っておらず、むしろ、愛を通して得られる罪の赦しということに力点を置いていることである。クレメンスは信仰義認の教理の反対者と戦う必要はなく、分裂し内紛状態の中にあるコリント教会の信徒たちに倫理的教えを与える必要があったのである<sup>18</sup>。

死後の幸いは、1-2 世紀のキリスト者が直面していた困難な状況の中で重要性を帯びた<sup>19</sup>。使徒教父文書の多くは、信徒が迫害下にあることを前提としてい

- 
- 16 E. Massaux, *The Influence of the Gospel of Saint Matthew on Christian Literature before Saint Irenaeus* (trans. N.J. Belvat/S. Hecht; 3 vols; Macon, GA: Mercer University Press, 1990) 1.52; A. Lindemann, *Die Clemensbriefe* (HBNT 17; Tübingen: Mohr, 1992) 147.
  - 17 Lindemann, 147 に賛成, H.E. Lona, *Der erste Clemensbrief* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998) 538 に反対。
  - 18 O. Nwachukwu, *Beyond Vengeance and Protest: A Reflection on the Macarisms in Revelation* (New York: Peter Lang, 2005) 53 も同趣旨。
  - 19 D.E. Aune, *Revelation* (3 vols; WBC 52A-C; Waco, TX: Word, 1997-98) 2.838-839.



る (I クレ 1.1; 7.1; 45.1-5; イグ・ロマ 2.1-3.5; ポリュ・フィラ 2.3; ヘルマス「幻」2.2.1-7)。そのような環境の中では、神への信仰は迫害や苦難にめげずに信実を貫くことを意味した。*πίστις* とは、神への信仰であると同時に信実である (ロマ 2: 10, 13; 3: 10; 14: 12)<sup>20</sup>。I クレ 44.5 では、責められることのないような生涯を終えて、天における地位を確かなものとした長老が幸いとされている。この幸いの宣言は、忠実な信徒へ与えられる天上の幸いを告げている。

天上の幸いの主題は、初期ユダヤ教黙示文学や初期キリスト教黙示文学にしばしば見られる主題である。エチ・エノ 58: 2 と 81: 4 に出て来る幸いの宣言は、天において義人を待っている幸いに言及している。エチ・エノ 81: 4 においてエノクは、「幸いなるかな、義人また善人として死におもむき、不義を責める書を書かれたことがなく、咎を見いだされない人。」と述べる<sup>21</sup>。この幸いの宣言の関心は義人として模範的な人生を送った者の幸福に向けられている。さらに、スラブ語のエノク書 42: 6-7 は、次のように述べる。

「幸いである、主の名を敬い、常に御前にあって仕え、畏れをもって贈り物をなし、命を献げ、生涯において義しく生きて死んだ人は。

幸いである、金のためではなく、正義のために、どのような見返りも期待せず、義しい裁きを下す人は。品類のない裁きが彼に下される結果となるであろう」<sup>22</sup>。

この幸いの宣言は正義を行い、公平な判断を下し、社会的に弱い立場の人々に対して憐れみを示した人々に与えられている死後の幸いを語っている。

20 原口尚彰「パウロにおける *πίστὸς ὁ θεός/πίστις τοῦ θεοῦ*」『パウロの宣教』教文館、1998 年、196-200 頁。

21 『旧約外典偽典』第 4 巻 (教文館、1975 年) 250 頁より引用。

22 J. Charlesworth, *The Old Testament Pseudepigrapha* (2 Vols; Garden City, NY: Doubleday, 1983) 1.168 に提示されている英訳からの重訳。この本文は、短本文ではなく、長本文に基づいている。

黙 14: 13 では天からの声が、「幸いである、主にあってこれ以後に死を迎える死者は。」と語る。この幸いの宣言は信仰のうちに世を去る者の幸いのことを言っている。同様に、黙 20: 6 は死後の幸いを差して、「幸いであり、聖である、最初の復活に与る者は。」と述べる。

イグナティオスは幸いの宣言の文学形式を唯一度しか用いていない。イグナティオスは、牧会の職務を託された献身的な教会指導者は幸いであると述べる(イグ・フィラ 10.2; I クレ 44.5)。教会指導者が主によって祝福されているという考えは、教会の秩序や指導者への服従の要求と表裏一体をなしている。

他方、一部の教父文書では、形容詞 *μακάριος* を人の呼称の前に称号のように用いて、パウロを、「幸いな使徒パウロ」と呼んだり(I クレ 47.1)、モーセを「幸いなモーセ」と呼んでいる(I クレ 43.1; さらに、ユスティノス「トリュフォンとの対話」56.1 を参照)<sup>23</sup>。こうした用例は、2 世紀の教会において *μακάριος* の称号的用法が始まりつつあることを示している (I クレ 44.5; ポユ・フィラ 3.2 も参照)<sup>24</sup>。

### 2.3 ポリュカルポスの手紙における幸いの宣言

ポユカルポスは *μακάριος* という単語を頻繁には用いていない。しかし、使徒教父の中でこの著者だけが共観福音書の幸いの宣言を明示的に引用している点は注目に値する。ポリュ・フィラ 2.3-4 は、*μακάριοι οἱ πτωχοὶ καὶ οἱ διωκόμενοι ἕνεκεν δικαιοσύνης, ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ* (幸いである、貧しい者、義のために迫害されている者、神の国は彼らのものだからである) となっている。この引用文には、*μνημονεύοντες δὲ ὧν εἶπεν ὁ κύριος διδάσκων* (主が教えて語ったことを思い起こしつつ) という導入句が付けられ、主の言葉であることを明示されている (2.3a)。ポリュ・フィラ 2.3 においてポリュカルポス

---

23 Lona, 506.

24 PGL. 821-823.

は山上の説教の非常に簡潔な要約を与えている(マタ 5: 1-7: 27)<sup>25</sup>。彼はこの語録の語順を自由に変更し、言い換えている(ポリュ・フィラ 2.3b とマタ 7: 1, ポリュ・フィラ 2.3c とマタ 6: 14, ポリュ・フィラ 2.3d とマタ 5: 7, ポリュ・フィラ 2.3e とマタ 7: 2 を比較せよ)。ポリュ・フィラ 2.3-4 は実際のところ、山上の説教の最初と 8 番目の幸いの宣言を組み合わせしており(マタ 5: 3, 10), その間に 6 つの幸いの宣言を省略している。文言はマタイ 5 章に用いられている文言と僅かに異なっている。マタイ 5: 3 に出て来る ἐν τῷ πνεύματι (霊において) という句はポリュ・フィラ 2.3 には出てこないし、ポリュカルポスは、マタ 5: 10 に出て来る ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν (天国) ではなく、ルカに出て来る ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ (神の国) の方を用いている<sup>26</sup>。信徒は, οἱ πτωχοί (貧しい者), もしくは, οἱ διωκόμενοι ἐνεκὲν δικαιοσύνης (義のために迫害される者) と呼ばれている。Δικαιοσύνη (義) は, ポリュカルポスが倫理的教養に用いる鍵概念であり, 後続する文節でその具体的内容について詳述する (ポリュ・フィラ 3.1-3; 4.1-3)。ポリュカルポスの実践的な視点からは, δικαιοσύνη (義) は, 信仰, 希望, 愛という主要な徳目より構成されている (ポリュ・フィラ 3.1-3; さらに, I コリ 13: 13; I テサ 1: 3; 5: 8; コロ 1: 4-5 他を参照)。こうした徳目を実践する者は ἐντολὴν δικαιοσύνης (義の戒め) を成就していると宣言される (ポリュ・フィラ 3.3)。

## 2.4 ヘルマスの牧者における幸いの宣言

この黙示的文書においてヘルマスは屢々天に挙げられて新しい啓示や教示を受ける。「幻の書」の第 2 章において彼は信徒に対して彼らの罪を指摘するとともに, 救いの展望を語るようにと命じられる (ヘルマス「幻」2.2.1-7)。彼らは予想される艱難の中でも信仰を捨てなければ, 幸いであるとされる。ヘルマス

25 Massaux, 3.28-31.

26 Köster, 118; Köhler, 99-100.

「幻」2.2.7 は、*μακάριοι ὑμεῖς ὅσοι ὑπομένετε τὴν θλίξιν τὴν ἐρχομένην τὴν μαγάλην καὶ ὅσοι οὐκ ἀρνήσονται τὴν ζωὴν αὐτῶν*（幸いである，到来する大きな艱難を耐え，命を否定することの無い者は）となっている。

ヘルマスの牧者「戒めの書」では，倫理的教訓の要素が強くなる。信仰，神を畏れること，義しい言葉，真実，忍耐等の徳目を守る者は幸いであるとされる（ヘルマス「戒め」8.1.9）。「喩えの書」では，読者に対して主の戒めを実行するように勧めるために幸いの宣言が援用されている（ヘルマス「喩え」6.1.1）。ヘルマスは自問自答して *μακάριος ἔσομαι, ἐάν ἐν ταῖς ἐντολαῖς ταύταις πορευθῶ, καὶ ὅς ἐάν πορεύσῃται ἐν αὐταῖς μακάριος ἔσται*（幸いである，もし私がこれらの戒めに従って歩むならば。また，これらの戒めのうちに歩む者は幸いである。）と述べる（ヘルマス「喩え」6.1.1）。忠実な信徒は幸いであるとされる（9.24.2）。ヘルマス「喩え」9.29.3 は，*μακάριοι οὖν ὑμεῖς, ὅσοι ἂν ἀρηγῆτε ἀφ' ἐαυτῶν τὴν πονηρίαν, ἐνδύσθητε δὲ τὴν ἀκακίαν*（幸いである，あなた方は，悪を自分から取り去り，善を身にまとう者は）と述べる（ヘルマス「喩え」9.30.3）。ヘルマスの牧者に用いられている幸いの宣言には，他の新約文書には平行例がない。著者が幸いの宣言を用いる際に，口頭伝承を引用しているのか，その場で臨機応変に幸いの宣言を創り出しているのかは資料不足で判断出来ない。ヘルマスの牧者において幸いの宣言が多用されているということは，この文学形式が当時の教会用語の一つとなっている自由に援用出来るものであったことを示している。

### 3. 結論

(1) 使徒教父文書は幸いの宣言の文学形式を用いる際には大変柔軟な態度を示している。使徒教父文書の幸いの宣言には，旧約聖書や新約聖書の例と同様に三人称が用いられるのみでなく（ディダケー1.5；バルナバ1.2；10.10；I クレ40.4；48.4），二人称や（ヘルマス「幻」2.2.7；「喩え」9.29.3），一人称が用い

られている (I クレ 50.5; ヘルマス「幻」1.1.2; 「喩え」6.1.1)。一部の文書において (バルナバ 11.8; ヘルマス「幻」3.8.4), 幸いとされる根拠を与える副詞節は共観福音書におけると同様に  $\delta\pi$  によって導入されている (マタ 5: 3, 5, 6, 7, 8, 9; ルカ 6: 20, 21)。しかし, 他の文書では, 幸いの宣言の後に,  $\epsilon\delta\upsilon$  (ヘルマス「喩え」5.1.3; 6.1.4), または,  $\epsilon\iota$  (I クレ 50.5) によって導かれる条件節が続いている。さらに, 幸いの宣言の直ぐ後に,  $\gamma\alpha\rho$  で導かれる文が続く場合もある (ディダケー1.5; I クレ 39.4; 44.5; 56.6)。

(2) 使徒教父文書における幸いの宣言の背景には, 旧約聖書, 新約聖書, 教会の口頭伝承等様々な可能性がある。第一に, 知恵の詩編中の幸いの宣言が(詩 1: 1; 32: 1-2), バル 10: 10 と I クレ 50.5 に引用されている。第二に, 共観福音書の幸いの宣言がポリュ・フィラ 2.3 に用いられている。第三に, 他の幸いの宣言は (I クレ 35.1; 44.5; 47.1; 48.4; 50.5, 6; 56.6; II クレ 16.4; 19.3; イグ・フィラ 10.2; ポリュ・フィラ 3.2; 9.1; 11.3; 12.1; ヘルマス「幻」1.1.2; 2.2.7; 「戒め」8.1.9; 「喩え」2.10; 5.3.9; 6.1.1; 9.29.3; 9.30.3), 教会の口頭伝承の引用もしくは, 著者による臨機応変な創作であるが, そのどちらであるかを判断するのは平行例がない限り困難である。

(3) 共観福音書において, 幸いの宣言は演示的機能を果たしている。それらは特定の人々に対して, 彼らの置かれた経済的または精神的状態の故に (マタ 5: 3-6; ルカ 6: 20-22), 或いは, 彼らの姿勢の故に (マタ 5: 7-9), さらに, 義のために迫害されている故に (マタ 5: 10, 11-12; ルカ 6: 23), 幸いであると告げている。これに対して, 使徒教父文書の幸いの宣言は, 幸いな状態に達するためには, 示されている倫理的基準を満たすように読者に促している (ディダケー1.5; バルナバ 1.2; 10.10; 11: 8; I クレ 40.4; 48.4; II クレ 16: 4; 19: 3, 4; イグ・フィラ 10.2; ポリュ・フィラ 2.3; 11.3; 12.1; ヘルマス「幻」3.3.3; 3.8.4; 「戒め」8.1.9; 「喩え」2.10; 5.1.3; 5.3.9; 6.1.1; 9.24.2; 9.29.3; 9.30.3)。使徒教父文書の幸いの宣言は, 全体的に見て倫理的勧告の機能を強く

持っていると言える。

## 文献表

### 1. 一次史料

- Bihlmeyer, K. *Die Apostolischen Väter* (ed. W. Schneemecher; 3rd ed; Tübingen: Mohr, 1956).
- Ehrman, B.D. ed. *The Apostolic Fathers* (2vols; LCC 24-25; London/Cambridge, MA: Harvard University Press, 2003).
- Lindemann, A./H. Paulsen, *Die Apostolischen Väter* (Tübingen: Mohr, 1992).
- Rodorf, W./A. Tuilier. *La doctrine des Douze Apôtres (Didache)* (Sources chretiennes 248; Paris: Editions du Cerf, 1978).
- Schöllgen, G. *Didache: Zwölf-Apostel-Lehre* (Freiburg i.Br.: Herder, 1991).
- Whittaker, M. *Die Apostolischen Väter. I. Hirt des Hermas* (Berlin: Akademie, 1967).

### 2. 二次文献

- Aune, D.E. *Revelation* (3 vols; WBC 52A-C; Waco, TX: Word, 1997-98).
- Bauer, W./H. Paulsen. *Die Briefe des Ignatius von Antiochia und der Polykarpbrief* (Tübingen: Mohr, 1985).
- Betz, H.D. *Essays on the Sermon on the Mount* (Philadelphia: Fortress, 1985).
- . *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995) 93-97.
- Broer, I. *Die Seligpreisungen der Bergpredigt* (Königstein/Bonn: Hanstein, 1986).
- Brooke, G.J. "The Wisdom of Matthew's Beatitudes (4QBeat and Mt.5: 3-12)," *Scripture Bulletin* 19 (1989) 35-41.
- Cazelles, H. "אשרי," *ThWAT* 1.481-485.
- Charlesworth, J.H. "The Qumran Beatitudes (4Q525) and the New Testament (Mt 5: 3-11, Lk 6: 20-26)," *RHPR* 80 (2000) 13-35.
- Collins, J.J. *Seers, Sybils and Sages in Hellenistic-Roman Judaism* (Leiden: Brill, 1997) 116-117.
- Dormeyer, D. "Beatitudes and Mysteries," in *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins; Atlanta: Scholars Press, 1998) 345-357.
- Del Verme, M. *Didache and Judaism: Jewish Roots of an Ancient Christian-Jewish Work* (New York/London: T & T Clark International, 2004).
- Draper, J.A. ed., *The Didache in Modern Research* (Leiden: Brill, 1996).
- Dupont, J. *Les Béatitudes* (3 vols; Paris: Gabalda, 1958-73).
- Fabry, H.J. "Die Seligpreisungen in der Bibel und in Qumran," in *The Wisdom*

- Texts from Qumran and the Development of Sapiential Thought* (eds. C. Hempel/A. Large/H. Lichtenberger; Leuven: University Press, 2002) 189-200.
- Fitzmyer, J.A. "A Palesitnian Jewish Collection of Beatitudes," idem., *The Dead Sea Scrolls and Christian Origins* (Grand Rapids: Eerdmans, 1992) 111-118.
- Frankmölle, H. "Die Makarismen," *BZ* 15 (1971) 54-55.
- Guelich, R. "The Matthean Beatitudes: 'Entrance Requirements' or Eschatological Blessings?," *JBL* 95 (1976) 415-434.
- Hagner, D.A. *The Use of the Old and New Testaments in Clement* (NTSup 34; Leiden: Brill, 1973).
- 原口尚彰「パウロにおける πιστὸς ὁ θεός/πίστις τοῦ θεοῦ」『パウロの宣教』教文館, 1998年, 196-200頁。
- 同「4Q185/4Q525における幸いの宣言」『教会と神学』第42号(2006年)41-68頁。
- Hauck F./G. Bertram, "μακάριος κτλ.," *ThWNT* 4.365-373.
- Hellholm, D. "Beatitudes and their Illocutionary Functions," *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins; Atlanta: Scholars Press, 1998) 284-334.
- Hengel, M. "Zur matthäischen Bergpredigt und ihrem jüdischen Hintergrund," *ThR* 52 (1987) 332-341 (=ders., *Judaica, Hellenica et Christianica: Kleine Schriften*. WUNT 109; Tübingen: Mohr, 1999, 224-233).
- Janzen, W. "Asrê in the Old Testament," *HThR* 58 (1965) 215-226.
- Jefford, C. *The Didache in Context: Essays on the Text, History and Translation* (Leiden: Brill, 1995).
- . *Reading the Apostolic Fathers: An Introduction* (Peabody, MA: Hendrickson, 1996).
- . *The Sayings of Jesus in the Teaching of the Twelve Apostles* (Leiden: Brill, 1989).
- Käser, W. "Beobachtungen zum alttestamentlichen Makarismus," *ZAW* 82 (1970) 225-250.
- Kloppenborg, J.S. *The Formation of Q* (Philadelphia: Fortress, 1988) 172-173.
- . "The Use of Synoptics or Q in Did. 1: 3b-2: 1," in *Matthew and Didache* (ed. H. van de Sandt; Assen: Royal Van Gorcum; Minneapolis: Fortress, 2005) 105-129.
- Knoch, R. *Die Lehre der zwölf Aposteln* (Tübingen: Mohr, 1920).
- Koch, D.-A. *Die Schrift als Zeuge des Evangeliums. Untersuchungen zur Verwendung und zum Verständnis der Schrift bei Paulus* (Tübingen: Mohr, 1986).
- Köhler, W.-D. *Die Rezeption des Matthäusevangeliums in der Zeit von Irenäus* (WUNT 2.24; Tübingen: Mohr, 1987).
- Köster, H. *Synoptische Überlieferung bei den apostolischen Vätern* (Berlin: Akademie, 1957).

- Limburg, J.T. "Psalms, Book of," *ABD* 5.532-534.
- Lindemann, A. *Die Clemensbriefe* (HBNT 17; Tübingen: Mohr, 1992).
- Lona, H.E. *Der erste Clemensbrief* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998).
- Luz, U. *Das Evangelium nach Matthäus* (Mt 1-7) (2. Aufl.; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2002) 267-294.
- Massaux, É. *Influence de l'Évangile de saint Matthieu sur la littérature chrétienne avant saint Irénée* (de. F. Neiryck; BETL 75; Leuven: University Press, 1950).  
ET: *Influence of the Gospel of Saint Matthew on Christian Literature before Saint Irenaeus* (3 vols; Macon, GA: Mercer University Press, 1990-93).
- Niederwimmer, K. *The Didache: A Commentary* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1998).
- Oxford Society of Historical Theology. *The New Testament in the Apostolic Fathers* (Oxford: Clarendon, 1905).
- Osiek, C. *Shepherd of Hermas* (Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 1999).
- Paget, J.C. *The Epistle of Barnabas: Outlook and Background* (WUNT II. 64; Tübingen: Mohr, 1987).
- Paulsen, H. *Studien zur Theologie des Ignatius von Antiochien* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978).
- Puech, E. "4Q525 et les péripécopes des Béatitudes en Ben Sira et Matthieu," *RB* 98 (1991) 80-106.
- Radke, H. *Ignatius von Antiochien und die Paulusbriefe* (Berlin: Akademie, 1967-68).
- Rhodes, J.N. *The Epistle of Barnabas and the Deuteronomistic Tradition* (WUNT II. 188; Tübingen: Mohr, 2004).
- Sato, M. *Q und Prophetie* (WUNT II. 29; Tübingen: Mohr, 1988) 247-254.
- Schoedel, W.R. *Ignatius of Antioch* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1985).
- Schulz, S.Q. *Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich: Theologischer Verlag, 1972) 76-84.
- Strecker, G. *Die Bergpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984) 28-49.
- . "Die Seligpreisungen der Bergpredigt," *NTS* 17 (1971) 255-275.
- Tuckett, C.M. "Synoptic Tradition in the Didache," *The Didache in Modern Research* (ed. J.A. Draper; Leiden, 1996) 92-128.
- Van de Sandt ed. *Matthew and Didache: Two documents from the Same Jewish-Christian Milieu* (Assen: Royal Van Gorcum, 2005).
- Vielhauer, P. *Geschichte der urchristlichen Literatur* (Berlin: de Gruyter, 1985).
- Wengst, K. *Didache (Apostellehre)* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1994).